

寄付のご報告

ご挨拶

西日本豪雨ならびに北海道胆振東部地震で犠牲となられた方々に深く哀悼の意を捧げますとともに、いまま困難な避難生活を送られている被災者の皆様が一日も早く日常を取り戻されますことを衷心よりご祈念申し上げます。

センター開設より、大変多くの皆様にご支援を頂いておりますことをここに報告申し上げます、また今後も起こりうる大規模災害に備え、社会に貢献する施設の運営に邁進する所存でございます。皆様方のさらなるご理解とご支援の継続を深くお願い申し上げます。

一般社団法人 九州動物福祉協会
理事長 日名子泰通

①「九州災害時動物救援センター」への一般寄付金
累計額 ¥14,754,628

②「一般社団法人 九州動物福祉協会」賛助会員
(H30,6 /未現在)

	個人	法人	合計
会員数	38	103	141
入会口数	203	391	596
入金額	203,000	3,909,676	¥4,112,676

皆様のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

九州災害時動物救援センター施設概要

管理棟（診療室、事務室、ミーティングルーム、宿泊所）
大犬舎×1棟、中犬舎×1棟、コテージ型犬猫舎×14棟、大型ドッグラン×3区画、中型ドッグラン×2区画



九州災害時動物救援センター

所在地：大分県玖珠郡九重町湯坪1625
TEL：0973-79-2741

VMAT講習会

東日本大震災の教訓を得て平成25年に福岡県獣医師会を中心に発足した災害派遣獣医療チームVMAT (Veterinarian Medical Assistance Teamの略)の九州地区合同の合宿訓練が、9/25~26の二日間、当センターにて行われました。災害発生時に、いち早く災害の現場に入り獣医療分野での活躍が期待されるVMAT隊員には、極めて実践的なスキルが必要となります。今回は現隊員と候補生の25名の獣医師が参加し、被災現場や避難所の状況を想定したプログラムを通して、各個人の技術向上に努めました。

このえ
九重の風

No. 3

一般社団法人 九州動物福祉協会
福岡県福岡市中央区渡辺通 5-2-25 7F

朝倉市長よりメッセージをいただきました



朝倉市長 林 裕二

はじめに、本年7月上旬、西日本の広い範囲を襲った記録的な豪雨で犠牲となられた方々に対し深く哀悼の意を表しますとともに、生活の基盤を失い、その再建への取組を余儀なくされた被災者の皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

折しも7月5日には、朝倉市において、早朝より強い雨が降り続く中、一年前の九州北部豪雨災害の犠牲者追悼式典を執り行ったばかりのところ再びの被災でありました。

数十年に一度と言われる豪雨が昨年、今年と続げざまに故郷を襲い、その風景を一変させてしまう、そしてなにより尊い人命と人々の日常を一瞬で奪ってしまう。昨今の異常気象と呼ばれる現象が何に起因するのかは専門家の研究を待つよりありませんが、私ども市政を預かる者としては、このような事態は毎年でも起こりうることとして、防災・減災の取組を進めていかなければならないとの決意と責任を痛感した次第でございます。

さて、昨年の九州北部豪雨災害では、未曾有の災害を前にして、前任の森田市長が陣頭指揮を執られ、私も地元県議として、早期の激甚災害指定をはじめ山積する課題に森田市長と手を携えて懸命に取り組んで参りました。その折の大変印象深い出来事が九州災害時動物救援センターのご支援でした。

朝倉市でも、大変多くの被災者とともに、その家族の一員である犬や猫も避難生活を強いられました。しかし、避難の長期化が見込まれる中、避難所とともに生活を続けることが困難となったこれらの動物たちを同センターに避難させていただき、手厚く保護をしていただいたことは、厳しい避難所生活の中でも飼い主に安心と前を向いて暮らす希望を与え、その生活再建の大きな手助けとなりました。あれから1年余り、同センターに預けられていた動物たちも徐々に家族の元に戻ることができているとの報に接し、改めて、

運営されている一般社団法人九州動物福祉協会の日名子理事長や、同センターの設立に尽力された公益社団法人日本獣医師会の藏内会長ほかご関係の皆様に対しまして、故郷朝倉を代表して衷心より感謝申し上げます。

また、私ごとではございますが、私の故郷朝倉への思いと災害に立ち向かう決意を述べさせていただきます。

昨年7月の発災以来、文字どおり昼夜を問わず故郷の復旧・復興に奔走されていた森田前市長が、その激務の中、今年の2月に病に倒られました。病床においてもなおご自分の手で復旧・復興をやり遂げるとの強い決意を持たれていた森田前市長でしたが、どうしてもお身体は思うに任せず、苦渋のご決断で4月の市長選挙へのご出馬を断念されたのです。その思いは大変重く、朝倉の復旧・復興はまだ始まったばかりです。誰かがそのバトンを引き継いで前に進めていかなければなりません。森田前市長は、長年の盟友として信頼関係の中でその思いを私に託して下さいました。極めて短い準備期間ではありましたが、多くの支援者とともに「朝倉(ふるさと)を取り戻す」のスローガンのもと選挙戦に臨み、幸い市民の皆様のご理解をもって当選をさせていただきました。今この国における災害は、我々の理解や想像をはるかに超える規模で、どこでも起こりうる状況にあります。私は、災害新時代ともいえる現代の防災・減災のあり方と真摯に向き合い、託された重責を果たしていく所存です。

また、平成28年熊本地震や九州北部豪雨災害において多くの動物とその飼い主を救った九州災害時動物救援センターのご活躍を目の当たりにし、その役割の大きさ、重要さを深く痛感したところであり、私としましても、微力ながらその活動を支援してまいり所存でございます。皆様におかれましても、是非、ご理解とご支援をお願い申し上げます。

末筆となりましたが、人と動物の絆を守る要としての貴センターの益々のご活躍とその活動が全国に広がってまいりますことを心より祈念申し上げます。

平成30年7月豪雨(西日本豪雨災害)

昨年7月に福岡県朝倉地域を中心として発生した未曾有の豪雨災害の記憶も新しい中、またしても激しい豪雨が九州を襲いました。しかも7月3日頃から降り出した雨は、7月8日にかけて西日本全域に広がり、台風7号の影響で活発化した梅雨前線によって各地で洪水や土砂災害を引き起こすなど、200名を超える犠牲者を出す甚大な災害となりました。

特に広島、岡山、愛媛など普段は雨の多くない瀬戸内沿岸地域の被災状況は極めて深刻であり、上下水道や通信、さらには交通網への被害などが広域的に発生する事態となり、また被害状況も地域によって大きく異なっているため、その対応も極めて複雑になっています。

呉市など土砂崩れや土石流の破壊的な被害が多く見られた広島県、倉敷市真備町など河川の氾濫や堤防の決壊による浸水被害が目立った岡山県、愛媛県西予市では野村ダムが満水に近づいたため放流量を急増させたところ肱川が氾濫し犠牲者が出る事態となりました。

九州においても各地で被害が発生しました。久留米市では大刀洗川が氾濫し1,000棟を超える浸水被害に見舞われ、北九州市では崖崩れが発生し犠牲者を出すなど、土砂崩れによる住宅被害も700棟近くにのびました。

このように非常に広範に渡る被災状況を受けて、各県の獣医師会では被災動物の一時預かりや、防疫の観点からのノミ・ダニ駆除などの対応を迅速に進められ、これまでのところ動物に関する大きな問題が起きていないことは、関係者の方々のご尽力の賜物と深く敬意を表しますとともに、これからの復興・復旧へのさらなるご活躍を祈念するところです。

尚、九州災害時動物救援センターとしては、発災直後より各県の動物救護本部などからの要請に応えるべく準備しており、また一部の被災動物を緊急措置として保護いたしました。

昨年、今年と梅雨の時期に豪雨災害が発生する状況は、やはり日本の気候環境が変化していると捉え、それに対する備えを常に心掛ける必要があるのではないのでしょうか。大規模災害時の救護や避難については、まず人命が優先されますが、長期に及ぶ避難生活においては、公衆衛生や防疫の観点からも、被災した動物を適切に保護管理することは非常に重要です。また昨今の災害規模の大きさは、自治体の枠を超えた広域連携も必要となってきています。

公益社団法人 日本獣医師会の支援のもと常設の災害ペットシェルターとしては、全国に先駆けてスタートした九州災害時動物救援センター。その活動と理念の重要性が改めて注目されています。

動物病院も機材などが浸水被害を受け診察できない状態に(倉敷市真備町)



道路脇には大量の「災害ゴミ」が積まれていた(倉敷市真備町)

被災直後の倉敷市真備町の様子



被災直後の倉敷市真備町の様子

スキルアップ講習会

センターでは4月より、JAHA認定家庭犬しつけ方インストラクターの森先生の指導のもとスタッフのスキルアップ講習会を定期的実施しています。

災害時にはセンターに様々な性格の犬や猫が集まります。全ての動物が日頃からしつけやトレーニングを受けているとは限らないため、その動物の世話をするためにはスタッフも多くの知識と経験が必要になります。動物の気持ちや行動を見極めることで咬傷事故を未然に防ぎ、またスタッフの技術向上によりセンター独自でしつけ方教室を開催するなど啓蒙活動に繋がってきたいと考えています。



コラム

戦う防災

九州災害時動物救援センター(以下九重センター)は4つの柱で運営されています。それは、1)災害対応 2)教育活動 3)地域活性 4)社会貢献 の4つです。(図参照)

災害対応については被災動物収容はもちろんですが、常設シェルターの先進モデルとしての検証も行っています。九重センターは災害がない時にこそさまざまな活動をしているのです。



図：KIDARCの四つ葉

まずひとつは、行政職員に対する防災技術向上セミナー、獣医師会の災害時動物支援チームであるVMATの実地訓練や防災士の合宿などを通して、発災時における動物救護の専門家の養成を行っています。さらに災害時に対応できる犬や猫の育成を行うための、家庭犬として最低限必要な訓練トレーニングも定期的に行っています。

ではなぜ平時時にこのような活動をしているのでしょうか？それは減災や防災という意識だけではなく、自分や家族を守るだけのスキルを自分自身が身につける「戦う防災」が必要だからです。

九重センターの存在意義というのは、まさにそこにあると言って良いでしょう。単なる動物収容施設なら、交通の便の良い場所で良いはずですが。日常を越えた大いなる自然を感じることができる九重センターだからこそできること、それは「戦う防災」のスキルを身につけた人材を育成することなのです。

九州災害時動物救援センター副センター長・獣医師 船津敏弘

犬のしつけ方教室(第二回)

昨年12月に地域の方々を対象として開催しました「犬のしつけ方教室」には多くの喜びの声を頂きました。今年も2回の開催を予定しており6月3日に第二回目を開催いたしました。

講師にはスタッフのスキルアップ講習会でもお世話になっている森先生をお迎えし、「なぜ犬にトレーニングが必要なのか」といった基本的なしつけの考え方を中心に約二時間の講習を行いました。今回は前回は上回る12名の参加者を数え、和気あいあいとした雰囲気の中で飼い主はもちろん、犬たちもしっかり学習できたことでしょう。

センターとしては、今後もペットと飼い主の絆が深まることを願い、こうした事業を推進していきます。

